『雨月物語』の他の話（冒頭の訳）

●「白峯」

逢坂の関所の役人に通行を許されてから、秋が来て色づいた山の紅葉は見過ごすことはできず、浜千鳥が足跡をつける鳴海潟、富士山の噴煙、浮島が原、大磯小磯の浦々。紫草が香る武蔵野の原、塩竈の海の穏やかな朝景色、象潟の粗末な苫葺きの漁師の家、佐野の舟橋、木曽の桟橋、心ひかれない所はなかったが、やはり西の国の歌に詠まれた名所を見たいと思って、仁安三年の秋には、葭が散る難波を経て、須磨明石の海辺に吹く風を深く感じながらも、旅を進めて讃岐の真尾坂の林という所でしばらくとどまる。野宿を重ねてきた長い旅路をいたわるというのではなく、仏道修行に都合がよいため庵を結んだのである。

●「菊花の約」

青々とした美しい春の柳は、我が家の庭には植えるべきではない。交流は軽薄な人と結ぶべきではない。柳は茂りやすいが、秋の初風が吹くと耐えることができない。軽薄な人はつきあいやすいが別れるのもまた速やかである。柳は春が来るたびに葉を青々と染めるが、軽薄の人は交流がいったん絶えてしまえば二度と訪れる日は来ない。

●「夢応の鯉魚」

昔延長の頃、三井寺に興義という僧がいた。絵が上手であることで名人として世間に認められていた。いつも描くのは、仏像・山水・花鳥などの一般的なものでなく、寺の勤めが暇な日は琵琶湖に小舟を浮かべて、網を引いて釣りをする漁師に銭を与え、獲れた魚を元の湖に放って、その魚が遊び泳ぐ様子を見て描いているうちに、年を経て精妙の極みに至ったのである。

●「仏法僧」

うらやすの国と呼ばれる日本の国は長い間穏やかな治世が続き、人々は仕事を楽しみ、春は花見をして安らぎ、秋は紅葉の林を訪ね、さらにはまだ見たことのない九州路も見なければと船旅をする人が、東の富士山や筑波山の峰々に心ひかれるのも気がそぞろなことである。

●「吉備津の釜」

「嫉妬深い女は扱いにくいものだが、年老いてからその功績がわかる」と、ああ誰がこんなことを言ったのだろうか。害がそれほど多くない場合でも仕事を妨げたり物を壊したりし、隣近所からの悪口は防ぎがたく、害が大きい場合にいたっては、家を失ったり国を滅ぼしたりして、天下の笑いものになる。昔から、この被害を受けた人がどれほどいるかわからない。死んで大蛇となり、あるいは雷を鳴らして怨みを晴らそうとする類の女は、その肉を塩漬けにしても十分ではないが、そのようなひどい例はまれである。